

万 病 の 外

金子曾政

医者ざらい、というのはどんな病気なのであろうか。中学以来の親友の医師も何人かはいるし、いまも毎週なんの抵抗感もなしに検診を受けてはいるが、それでも新たな診察を受けるとなると、やっぱり、お医者さんはこわい。

私が初めて医者のお世話になったのは就学直前で、難聴のきみがあるのを心配して、祖父が町の病院へつれていった。田舎の子供だったから、ただこわかった。中学を出て満州へ渡るとき、校医の身体検査があった。やさしい声で、向うへ行ったら支那語ですね、とか、馬賊が出て大丈夫ですか、などと話しかける。内気な私はだまってわらっていた。そしたら今度はこわい大きな声で、耳の検査をしてるんだからちゃんと答えなさい、という。卑怯だ、と思った。終戦の年に未教育補充兵で応召して、収容所で苦勞したが、栄養失調に大腸炎で歩けないほどになり、診断を受けた。受けてもクレオソート丸のほかになにもなかったが、若い、元気な軍医は、お前達はどうせ助からん、薬をやるだけ無駄なんだがなあ、といった。実際に毎日何人かは死んでいったし、死体を裸にして合祀碑の下の穴へのろのろと捨てていくのを知ってはいたが、班へ帰ると、もう診断は絶対に受けません、とぼろぼろ涙をこぼした。それはあなたを励まそうとして言ったのですよ、と班長は私を慰め、私の代りに労役に出してくれた。だんだん私にも軍医の気持ちがわかってはきたが、自分は決して死ぬまい、ひとりで生き抜こうと堅く決心した。それからの三年半、ずいぶんいろいろなことがあった。いっぱい病気もしたし、沢山の人の助けられもした。

引き揚げて金沢へ赴任するとき、身体検査表が要るとのことで、某国立病院の副院長をしていた友人のところへ行った。胸腹臓器異常なし、と書いて、これでよかろう、といった。古き、よき時代だった。ここへ来てからの何年間には不調の日もしばしばあったが、友人の手前、黙って耐えた。40年に高血圧で倒れた。1日半身不随。早口で、語尾が不明瞭だったのが、少しどもるようになり、しゃべるよりも、書く方がむしろ気が楽なようになった。しかし、帰国以来、当用漢字と新仮名遣いには悩まされつづけている。三島由紀夫や阿川弘之のような旧体制の文章を読むとふる里へ帰ったようで安心したものだが、この頃は自分の方が半分馴化して古いものにも新しいものにも戸惑いを感じるようになった。その点、若い人達は戦後教育が徹底しているから悩む心配はない。ただ、一緒にかかるたを取っても、け、ふ、を、か、き、り、のなどとたどたどしい。福田恒存編の“なぜ日本語を破壊するか”という本も出ているが、どうやら日本語の単純化に問題がありそうである。

執筆を依頼された「いつみ」も、古式床しく濁音がない。そういえば中央図書館で出している「こたたま」も濁っていないかった。友禅染の小袖地に、“こ”と“た”と“ま”の3字をのせたもので、図書館の有職故実に明るい人の話によると、“こ”は藤原公任“た”は藤原行成“ま”は紀貫之の書を模したものだ。同じ伝でいくと、“い”と“み”は貫之“つ”は道風ということになりそ

うである。中国語には日本語でいうような濁音はないから、むかしの日本文にも正式には濁音を使わなかったのかもしれない。発音を示すにも陽と容なら Yang と Yong だから、ヤウとヨウの区別は意味があったのだろう。この頃はなんでもデリカシィがなくなった。

医者はきれいといいながら、痘をやり、痛風をやり、もっと厄介な病気もやって、その都度お医者さんのお世話になった。そしてまた、そのたびごとに医者や看護婦さんの献身的な応待ぶりに感動した。人一倍恥ずかしがり屋で、いつもぎりぎりにならない駆けこまないで、性格から直さなければとも思ったが、根が天の邪鬼だから仕方がない。福井医大の高瀬先生は、“医者はきれいで結構、病気を癒すのは結局本人ですからね。われわれはお手伝いするだけなんですよ”と言われる。こういうお医者さんにあってはとでも勝てるものではない。精々ふだんから然るべき施設の然るべき人によく相談して、重い病気になんかならないことである。それにしても心にもない憎まれ口ばかりきくのは何科へ相談に行ったらよいものであろうか。 (金沢大学学長)

アメリカン・ルームメイト

大橋佳子

アメリカの言語障害学の草分けの一人としてまた吃音研究の権威として名声の高い西シガン大学のV教授のもとには、全米はもとより諸外国から研究者や学生が大勢集まっていた、その門前にはいつも国際色豊かな賑いがあった。東洋からは初めての留学生ということで私には一種の好奇の目が向けられていた。もう十数年も昔の話である。

V先生は私を迎えるにあたって日本に関する書物を15冊も読まれたということをして、ずっと後になって夫人から伺った。未知の国からやって来る一人の外国人学生をより良く理解するために、その人の文化的背景について十分予備知識を得ておきたかったからだと説明された。

たった一人の無名の学生のために勿体ないと思うと同時に、V先生に対する敬愛の念を一層深めた。

学生寮が開かれるまでの数日間は私はこの先生のお宅に招かれて滞在していたが、いよいよ明日から大学が始まるという日にV夫人に付添われて寮に移った。フロントで寮監から私のルームメイトはドロシィ・フォスリンガムだと聞かされた瞬間V夫人の顔が明るく輝いた。夫人の提案でこのことを早速V先生に伝え、先生は電話の向こうで大笑いをされてから、「本当に良かった」と何度もくり返された。夫人の説明によると、ドロシィは言語障害学を専攻する優秀な学生で来春は大学院に進む予定だった。親切で朗らかで共に暮らすには申し分がない。吃音であることからV先生がずっと目をかけてこられたが、同じような立場にいる吃音の私にとっても何かと好都合であろうと、V夫妻はこの偶然の組み合わせに大喜びをされた。

たしかにドロシィは魅力的で親切なところもあった。私達は初めのうちは結構楽しくやっていたが、お互いが最早物珍らしい存在ではなくなり、慣れ合ってみると、同居の煩わしさや相手の欠点

ばかりが目につくようになった。とりわけ我慢がならないと思ったのは彼女の二枚舌と饒舌だった。次期寮監補佐に抜擢されたことからドロシイは得意の絶頂にいた。毎晩のようにおとなしそうな下級生を自室に連れて来てはその子を相手に何時間でもひとりでしゃべりまくった。とうとうたまりかねてある夜私は苦情を言った。すると彼女は、憎たらしい顔付きをし開き直った。「昼間はほとんど空けていてやるのだから、夜ぐらいここにいてしゃべる権利がある。何をそんな勉強ばかりしていなくてはならないの」私の頭も要領も悪いと言わんばかりの口ぶりだった。その日を境私は図書館や寮の自習室に逃れて勉強することにし、自室にはなるべくいないように努めた。ドロシイは一向に態度を改める様子もなく、ますます勝手に振舞った。私はいつもの策略から彼女が言ったりしたりすることには全くの無関心を装っていた。表面的には平穩無事だったが冷い空気が流れ、溝は深まる一方だった。

やがて3月となり私の誕生日が近づいてきた。普通はルームメイトが相手の誕生日を覚えていて祝いのパーティを主催するのが習わしである。異国で初めて迎える誕生日の前はひどく寂しい気持ちがした。夜更けて寝仕度をしていると誰かがノックをした。ドアを開けてみると大きな包みを抱えた人を先頭に5、6人がなだれ込んで来た。呆っ気にとられている私に向って「日本時間で、誕生日おめでとう」と口々に言う。差し出された包みを大喜びで開いてみると、復活祭の兎のぬいぐるみが出てきた。淡い水色にピンクのリボン……春の訪れである。ドロシイはその場に居合わせていてさすがにきまりが悪かったのか、皆に向って弁解ともお世辞ともつかないような言葉を並べ立て、傍らからその兎をほめそやした。そして、頼まれもしないのに私に代わるように大仰に礼を述べた。

翌日もまた同じように自習室にいた。クラスメイトのマーティが呼びに来たので彼女の部屋に行きノックをしたが返事がない。そっとドアを開けてみると中は真暗である。仕方がないので引き返そうとした時、突然電燈がつき「ハッピー・バースデー」の大合唱が部屋の底の方から湧き上がった。びっくりして見るとパジャマやネグリジェ姿の寮生が近隣の部屋々々から大勢集まり皆思い思いの場所に腰を下ろしていた。天井も壁も目も覚めんばかりに華やかに飾り付けがしてあり、日米両国旗を立てたテーブルの上には送られてきたカードや贈物が山のように積んであった。小声で「ドロシイは？」と尋ねるとマーティは無言のまま肩をすくめた。おかげで私は久しぶりではしゃぎ楽しい思いをすることが出来た。最後に、その夜のフィナーレを飾る取って置きの賜りが披露されることになった。

マーティの合図でクラスメイト5、6人真中に進み出て輪を作り、歌いながら踊り出した。だが、途中から歌う様子が妙に変化してきた。あえぐように息を呑み込んだり、顎をがくがくふるわせたり、顔をしかめては歌の文句をきれぎれに言い、身をねじっておかしがった。ドロシイがどもる時の様子を大げさに真似ているのだ。まわりでそれを眺めている人達もお腹をかかえて笑いこぼした。マーティは音頭をとりながら得意げに私の方を見てウィンクをした。やめさせようとして私が立ち上ると彼女は急いで歩み寄って来て言った。「アメリカではトラブル・メーカーはこんな具

合にやっつけるのよ。あなたはこんなふうにはどもらないから心配しなさんな。ドロシイなんかになんかに負けていないでもっと戦えばいいのに。お手伝いしますわ」

全くショッキングな光景だった。おそらく当人が最も苦しんでいるであろう困難を、場合によっては一生涯背負い続けなければならないような問題を、こともあろうに障害学を専攻している連中がこういう形で取り上げて揶揄や攻撃の対象にしようとは……。やり切れない気持がいつまでも残った。同時に、障害と呼ばれるものに対する人々の暖い理解を当然のことのように期待していた自分の甘さがつくづく思い知らされ、前途に容易ならぬものを感じた。

私は文学部のヒューマン・コミュニケーションという授業に出ていた。エドワード・T・ホールのThe Silent Languageをテキストに、アメリカ人がなぜ外国人にあまり好まれないかという問題が真剣に論議された。一般にアメリカ人は他国の事情や立場や文化等については無知である。にもかかわらず善意のしからしめるところ自分のやり方を相手側に押しつけようとする傾向がある。要するにクロス・カルチュラル・コミュニケーションが不得手であり、そのために本当の友情が結ばれない、等々がその原因に取り上げられた。いろいろ思い当ることがあったのでレポートの提出を求められた時、私はルーム・メイトや誕生日の祝宴での出来事を引用しながら、日もまだ浅いというのにアメリカ人批判をやったのけた。このレポートが文学部の教官の間で相当話題にのぼったらしく、来学期からテキストの一部に使わせて欲しいという申し出があった。他学部でのことなので安心はしたものの、友達への迷惑を恐れて、一読してそれと知られそうな個所に修正を加えた上で公表することを承諾した。

ところが意外なことを耳にした。マーティをはじめあの夜物真似を演じた連中が揃ってV先生の科目を落され、単位が貰えなかった。不腹に思った彼女達は異議を申し立てに面会を求めたが、V先生の反応は極めて冷くてとりつく島もないという。てっきりドロシイの仕わざかと思ったが、彼女達の観察によるとV先生はそのドロシイさえも近頃は寄せつけないという。私はレポートのことを後悔し罪悪感に悩まされたがどうすることも出来なく黙っていた。寮を出てノルウェイから来ていた留学生と一緒に下宿することにした。外国人同志の同居は語学のために望ましくないと反対されたが、秋にはまた他の寮に住むという約束をして許可を得た。マーティは結婚を理由に退学してしまった。

夏休みが終って再びキャンパスに戻ったが院生となっている筈のドロシイの姿はどこにも見えなかった。急に東部の方の大学院に移って行ったという噂を聞いたが、その後の消息は知らない。友達のすすめで私は寄宿舎委員会宛てて一通の手紙を書いた。カレッジでフランス語を教えていたという年配の院生が新しいルームメイトに決った。そして十何年、彼女との交際は今も続いている。

(教育学部助教授 言語障害学)